金沢二十四地蔵 巡り　養智院地蔵　法住寺

阿武松緑之助 江戸相撲の実質初代横綱の谷風、二代目小野川のあと、1828（文政11）年38歳で横綱になった阿武松緑之助が挙げられる。鵜川の七海（現能登町七見）の出身で、阿武松が横綱になるまで横綱は31年間も空位だった。そのため落語や浪曲、錦絵で取り上げられ、着物の帯名までに名が冠せられるほど阿武松の人気は大変なものだった。

本場所よりも巡業が多く、阿武松はその看板であり、巡業主も務めた。「錦絵そのもの」とたとえられた華やかな姿で、金沢の犀川や浅野川の川原、所口（現在の七尾）などで勧進相撲や興行を行い、人びとと触れ合った。地方興行は1834（天保6）年45歳で引退した後も続け、士俵入りをし取り組みにも参加した。故郷をたつ時に、七海の氏神白山に成功を祈願したが、横綱になってもお礼を遂げていなかったため、55歳の時に、越後、高岡を巡業にしたおりに足を伸ばし、一行80数人と共に、故郷の伯参宮に相撲を奉納している。『北國文華』二〇一六年春

真宗移民 中瀬精一「土徳流離」

《走りと呼ばれた農業移民》

江戸時代中後期末の天明、天保の飢騒は、連年の天候不順による不作続きもあって農民の疲弊は著しく、道義廃退した惨状を詳記するものは打ちあげませんが、特に天保六年（一八三五）より七年にかけ、百件に及ぶ農民一揆、全国三十五の都市の米騒動、大阪、江戸には米屋の東北八戸藩の修状を逐世農民史は、天明三年（一七八三）十月より天明四年八月までに空き家となったもの三万五千戸、流行病により死者三万余人、他国へ亡したもの二万余人と記録しています。加賀藩から農民を逃亡させ、移住させていた相馬藩の人口の推移を相馬移民史でみると、元禄十五年に八万九千五百の人口が、三万二千二百人に減少したと記録しています。

※天明三年九月　浄明寺常夜灯

農民がいないと藩も武士も成り立ちません。自然回復を待っていられないところから、人口増加の激しかった北陸、特に加賀藩の真宗信者を寺院を通じて呼び込みました。当時の農民は他国へ出ることを逃亡として禁止しており、走りと呼ばれていました。

文化十年（一八一三）分の相馬藩への走りの中に、当目と合鹿の三人が含まれています。人相書きのついた逃亡者の報告書です。

なお、この文書の「配戦人員は、羽咋郡十五名、鹿島郡六名、鳳至郡三十一名、珠洲郡十五名、能美郡二十三名、河北郡二十名、総数百二十二名。二宮尊徳「政事は多端でも、取ると施すの二つに尽きる。取ることを先にすれば農民仇敵となり、施すことを先にすれば君臣となり国栄える」は、二宮仕法と呼ばれています。

余呉湖・天女の衣掛柳。

『三壺聞書』（宝永年間1704～11）に、加賀藩士山田四郎右衛門が著した越登賀の武将・名将の記録）「太鼓踊りの由来」「能登から原木を髪でなった縄で引っ張ってきた人足の疲れを癒すために、太鼓踊りを踊った」『滋賀県湖北昔話集』。

「葛の葉」 恋しくば尋ねてもみよ能く登る一宮の奥の社へ　信太妻、　信田妻とも。また葛の葉を主人公とする人形浄瑠璃および…　恋しくば尋ねて来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉。「葛の葉」

お座船歌 福浦港　まだら　三夜

輪島七つ七尾の天神さん 『浮世床』式亭三馬

佐渡は四十五里波の上

『東アジアの祭祀伝承と女性救済　目連救母と芸能の諸相』野村伸一風響社　2007　中世・鈴木正崇